

剣道の復活と父の教え

植田 一

終戦後一度影をひそめていた剣道が、全国的に復活の萌しが見え初めたことは、吾々同好の者にとってまことに欣ばしいことであります。

しかし、未曾有の変貌を遂げた現在の国民思想の中からは、昔のやり方そのままの剣道では、或いは一顧の彼方に次第におき忘れて行く運命にあったかも知れません。宗教の真髓が千古不壊の真理であるにもかかわらず、若き世代からは一向に顧みられず、むしろ逆行するかにさえ見える現状は、一体何を示唆していきましょうか、吾々は凝って直視反省してみる必要があります。

新しい民主主義思想の発足とともに、剣道のあり方も時代に即応したものでなければ嘘です。徒に儒教道徳的な形式の末葉にのみ執られず、健全明朗なスポーツとして立ち上がりたものです。そして大衆とともにあるスポーツとして、進んで行きたいものであります。

勝敗を競うスポーツである以上、相手に勝ることが望ましいに違いありませんが、かつての一部にみられた、あまりに敵愾心を燃やしすぎた結果、敗れて相手を恨み、空しく悲憤慷慨したあの心理を放擲して、相手のファインプレーには心からの拍手を送るだけの雅量が欲しいと思います。欧米のスポーツマンシップとはそれであり、優劣を競いながらも、そのスポーツを中心にした彼我一体渾然の融和感、それこそ剣道古来の精神に背かないものでありましょう。要はスポーツ錬成によって鍛え上げられた一大調和の精神が、人間の正しい本性を覚め、それが私生活の片隅にまでも顕現し出してこそ、始めて本当の剣の精神を掴み得たことになると思えます。

それにつけても憶い起こされることは、亡父が生前終始口にしていた言葉です。それは、「自分たちの修練しているものは剣の道である。撃剣でもなく、剣術でもなく、剣道である。故に道場にある心構えがそのまま、日常座臥の心構えに一致するよう、生涯を通じて心掛けねばならぬ」と。また、「勝って相手を讃え、敗けて相手を讃えよ」と。この一見解りきったはずの言葉の中に、しみじみ味わされる無限の訓えがあると懐かしく感じております。

ひっきょうスポーツといおうとなんと名付けようと、それは言葉の表裏でしかなく、底を流れる精神には厳として動かないものが存在するはずであります。そういった意味で今回の剣道の復活は、復活であると同時に、健全なスポーツとしての輝かしい新生でもあると考えられましょう。

(全日本撓競技選手権大会で個人優秀賞を得、新剣道社から創刊号投稿依頼で)

(昭和二八年二月)

敗兵罷り通る

植田 一

「敗軍の詩」か、「敗軍の将大いに語る」かについて、何か書けとの新剣道社の仰せであったが、敗将大いに語るという程の材料はここもと持ち合わせていないので、敗兵慎しく語る程度でご容赦を願い、その責を果たしたい。

今まで試合も随分してきたが、蔵前国技館のような広大な観衆を入れた試合場で試合をすることは始めてである。この試合場に立って試合するとき、今までと異なった感じを必ず受けるであろう。それを早く知らなければならない。これを観察する機会は間もなく訪れて来た。試合に先立って行われた入場式がそれである。

あの播鉢式の中につくられた舞台の試合場に立って、自分はまず考えてみたのである。観衆の雰囲気には別段考慮を払って見る必要はない。大きい試合はいくら大きくてもよい自分である。それでは何か。日頃限られた道場で練習している自分には、道場に接近した塀壁、窓があまりにも試合場そのものから遠く離れていること、ここに必ず間合の蹉跌を来すなにかがあるであろう。それに足下に踏まれている仮設の床板そのものが、いまままで馴れている道場の床板とは大分違った感じがする。この二つの状況の差異による錯覚をなくすために、先ずこれを呑み込んでおかなければなるまい。厳粛な入場式を行っている間に、不都合千万にも自分はこう考えてみた。

それで入場式が済むまでに一応調子を見て取った私は、ただ試合に全力を注いだのであった。試合については今更何もうことは無い。敗退はただ技術の未熟と、練習不足のよってもってきたところの厳然たる結果である。

しかしあの試合に出場した選手で、吾々とともに戦前活躍していた諸兄があまりにも少なかったことは、内心まことに淋しい感を深くした。

かりに出場選手の年令別を番組からひろくと、二十才代五名、三十才代三十五名、四十才代十二名五十才代一名となっている。四十才代十二名とはなんとという僅少な数であろうか。まだまだ出てきて貰える年であろう。私も四十才に足を踏み込んだ一人であるが、今後益々やる積もりでいる。

私はそこで考えた。誰かの言ではないが、「老兵は死せず、ただ再度を期して頑張るのみ」と。

(第一回全日本選手権大会に出場して 新剣道新年号 昭和二十八年十一月)

私の剣道観

植田 一

日本の剣道が他の国の剣法と違うのは、各流祖が必ず唱えた「活人剣」という言葉の中に、深い意義をもっていることです。刀匠が刀剣を鍛練するにあたっては、四方に張り綱をめぐらし、神を祭り、一切の不浄をさけて、清く正しい雰囲気の中で、「この刀よ人を守れ」と鍛え磨いたものであります。こうして作られた刀を持ってその操法を工夫研究した人々が、またそれと同じような心で錬磨に当たったのは当然なことです。

あの不世出の剣術の大家男谷上総守は、幕末の乱世においてすら、「止むを得ず刀を抜くことは、男子一生のうち一度あるかないかだ」といって、これをきびしく実行した。また有名な無刀流の開祖で鬼と呼ばれた山岡鉄舟は、彼の剣の生涯中ただの一度の斬り合いすらもしたことがなく、一匹の虫の命も尊んだといわれています。ここに私は日本剣道の真の姿を見出すことが出来ると思うのであります。

今度の戦争でとばっちりをうけ、誤解されたものに剣道があります。侵略の定義すら未だ定かでないのですから、過去の戦争の可否は別として、終戦直後`剣道は好戦的だ`とか、`今更剣道をやって何になるか`などと時々人がいっているのを耳にしたものですが、私の心にはこれにうなづけないものがあつたのであります。戦争そのものの否定は現在人類共通の悲願でありながら、しかもなお戦わねばならぬ宿命をになった人間とは実にあわれむべき存在で、この宿命は又永久に続くものでありましよう。戦争の非は当然なことです。然しながらこの宿命の上に立って一朝有事の際、祖国を守り得ない人間はまた更にあわれむべきものであります。

一億国民皆後鉢巻きで、勝利を目標に邁進しておきながら、敗れたからといって剣道が好戦的だとか、日の丸の旗が侵略の象徴であるなどというのは、これは口にする人こそ間違っているのであって、（勿論一部にそういう誤解をうけるような出来事があつたであろうが、それはその人達自身の間違った行動によるもので）、自己の責を他においかぶせる無責任な言葉であり、こうした態度は大体日本人の悪い癖だと思います。アメリカが占領行政の一環として剣道禁止を取り扱ったとき、日本の歴史とともに培われ育ってきた日本の剣道を、自ら目の敵にしてこれに迎合しすぎた一部日本人の信念の程度を、私は心からかなしむものであります。

× × × × ×

終戦直後復員した私は、疎開先において父と共に有志を集め、早速剣道の稽古を開始しました。道場がないので近辺の神社の境内を借り、昭和二十年九月から始めたのであります。遠く中讃地方から馳せ参じるものもあり、あの放心状態の世相の中で、ひと時の剣道の練習を楽しみ、稽古終わって松の翠を映す玉の汗に、明日への頑張りを語り合ったものです。

いよいよ二十年も終わりに近づいたとき、学校剣道が廃止されましたが、私は授業の出来なくなった学校に、そのまま居残ることは私の潔癖が許さず、年度末をもって勤務先の高松経済専門学校および高松商業学校を退職いたしました。そしてあっさりと野に下った私は、一統制会社に勤めることになったのであります。

この頃が剣道苦難の時代であります。幸い会社の務めに余裕があつたので、この苦難

のときにこそ剣道を学び続けたわけであります。千古不滅の尊い教えは、いつの世においても曇りなく燦然として輝いておりました。

その後四国軍政府の査察係将校ジェームズ・ジョーンズ中尉に会う機会が出来、彼の実に温かい理解と思いやりに、高松の一般剣道はどうやら順調に進んで行きました。大手を振るって練習が出来るようになった若い者達は、今度は練習だけでは物足りなく、遂に外部に進出して栗林公園グラウンド、金比羅さんの境内、教育会館、地藏寺のお堂、三越六階ホールを借りうけての昇段審査、県下各種団体、近府県各団体招待の大会試合が、昭和二十二年、三年、四年と次から次へ続けられて行き、あらゆる試合にはジョーンズ中尉の姿も見え、剣道愛好者と握手している彼の大きい手が、益々大きく映るようになりました。私は彼に剣道を教え、彼は私にフェンシングを教えるという約束も出来、期待しておりましたが、彼は突然出動することになり、遂に朝鮮戦線において惜しくも戦死をいたしました。日米双方の立場は異なれど、剣道フェンシングを学んだスポーツマンシップに何等変わるところなく、少なくとも高松における剣道は、近府県各地から非常な羨望でみられるような状態でありました。

かくする内私は二十五年の暮、高琴電鉄営業部に移りかわりました。私の担当する仕事の性質上、ビジネスオンリーにならざるを得ませんでした。新設早々の私の仕事に対し私の闘志は燃え、毎晩遅くなるまで仕事は続けました。もちろん会社の重役からは、剣道もやるよという温かい言葉は頂いていたのでありますが、剣道をやっている者が仕事がおろそかになっては恥である。私は与えられた仕事に対し、それに突き進んで行くのが剣道精神を生かす道と考え、剣道を愛すればこそ、私は剣道の稽古から遠ざかって行きました。三年というもの殆ど竹刀を手にする事が出来ませんでした。この間無形の敵は、ダンス、マージャン、パチンコ、競輪等々という姿で、誘惑という竹刀をもって私に試合をいどんで来、これらは鎧袖一触退りこれとばかり睨みとばしたものであります。

私は昨二十九年四月会社を退職、香川県警察の技官を拝命いたしました。私の剣道に対する考えは、戦前も戦争中も終戦直後も、また現在も何等変わることなく同じ信念で続けております。

× × × × ×

先般 NHK で剣道のことについてお話したことがあり、そのとき対談の S アナウンサーから、こんなことを聞かれたことがございます。「近頃の若い学生の中には、仮に百米を走った場合、それが一秒早かったからといって、その一秒が人生にとってどれだけの価値があるかというようなことを話す者がいるんですが、剣道においても戦前からの指導者である先生方と、アプレの若い者との間に何かそうした考えの矛盾があって、教えるのに苦心されるようなことはございませんか」と。なるほど S 氏のいわれるとおり、戦後派の青年の考えがちなことです。私も以前ちょっとそうしたことを考えてみたことはありますが、それが道場剣術に終わってしまって、その磨かれるはずの精神が一步も道場外へ出ない場合はそうであって、相手に一秒早くお面お胴を打ったからといって勿論それは、人生にとって少しも重要であるとは思われません。百米を一秒早く走って人生にどれだけの価値があるかといわれる学生と全く同じだと思います。しかし、その学生は一秒間の何分の一かを縮めるために、おそらく血の出るような努力をした人ではないはず。一秒の何分の一を縮めるには、並々ならぬ苦勞が伴うものです。先般屋島競技場でドイツのヒュッテラー選

手の、スターティング・ブロックを携げて一生懸命になっている疾走前の姿を見ましたが、それはただその時だけの真剣さだけではなく、彼の日常の態度に深いつながりがあるように見受けられました。

それと同じように、剣道の修練においてもまた大変な苦心がいるものです。剣を通じての術を磨くとともに、人間完成への努力を忘れ怠ってはなりません。剣の道は道場のみで達し得られるものではなく、行住坐臥皆修行です。「心正しからざれば剣また正しからず、剣を学ばんとする者は心を学べ」の諭えの如く、清らかな正しい気持ちでもって先ず竹刀を握ることが肝要であります。

× × × × ×

しかしここで特にお願いいたしておきたいことは、警察官諸賢の剣道修行は、一般の剣道とは多少おもむきが違うということです。それは警察官本来の使命により、犯人を逮捕する実力行使の場合の基礎訓練ということがはっきり目標に出ているからで、それゆえ技を磨き肝を練り、これをいざというとき実際に活用出来得るような実力を、真剣な練習によって養成しておかなければならないのであります。

先にも書きました人の命をあれ程尊んだ山岡鉄舟が、自己の春風館道場では朝夕出入りする門人の士気、身体の強健を養成するためには、徹底的な稽古を強要し、その一つの方法に誓願というものを作りました。先ず誓願を志す者は、その日から一日の怠りもなく満三力年の稽古を積み、最後に終日立切り二百本の試合をする。これを無事に済まし、さらに第二期の誓願をやり、それからさらに数年の稽古を積んで三日間立切り六百本の試合を行い、これを無事に済まし了えて、次にまた第三期の誓願となり、幾多の稽古を積んで七日間立切り千四百本の試合を行うのであります。その立切り試合の間中は一切外出を禁じ、三食は粥と梅干とに限られ、また試合の相手は血気の猛者、あるいはとびいりの新手を選抜するのであるから、立切り者の悪戦苦闘は実に言語に絶するものがあり、それがために四肢五体は皆腫れあがり、殊に往々にして血尿さえ排出する状況でありました。こうして名実ともに一人前に鍛え上げられたのであります。これをみても剣道修行の並々ならぬものがうかがえると思うのであります。

術科方面はその時その時の稽古が大切で、家へ帰ってから風呂の中で頭に手拭いをのせ、鼻の汗を片目で眺めながら、思い出してみられるようなものとは話が違うわけであります。

さらに大切なことは、その練習を行うに当たっては、正しい道順を経なければならないことです。建築を例にとってみますと、家を建て壁を塗り、飾りを施して始めてそこに美しい姿が現れ、他人が見ても立派に見えるのですが、この基礎工事を無理に急いで手数をふいたならば、決して立派な建築は出来上がりません。たとえ外観はよく見えても、何かのはずみにすぐ崩れてしまいます。面白くない土地ならし、基礎工事の時から十分入念に手を入れておくべきで、剣道においても初心者はいきなり勝負本位の練習に走らず、建築の時の土地ならし基礎工事にあたる基本動作、応用動作、打ち込み切り返し等に最も力を注ぐべきです。そうした道順を経た努力の後には、厳然として暴風雨にも動じない、見るからに立派で美しい家が出来上がるのです。

× × × × ×

警察官の任務の最大なものは、民衆の保護にあることは申すまでもありません。民衆に愛され信頼される警察官は、つよい警察官であると同時に、また優しい親切な警察官であ

らねばなりません。剣道においても強ければ強いほど、高段者であればあるほど、謙譲で礼儀正しく、真面目で立派に仕事の出来る警察官でありたいものです。

それこそ私の申す剣道精神に徹した、真に立派な警察官ということが出来ると思うのであります。

(警声二十八号 昭和三十年三月)

剣道あれこれ

植田 一

警察剣道は一般剣道と多少異なっており、実力行使の手段としてとりあげられているのであって、その訓練自体が目的となってくる。従って技を身につけることが大切で、頭だけで理論を覚えても、それが実際に活用出来ないようでは困るのである。

香川県警察でも藤沢本部長の意向により、本年から県下警察柔道大会を年二回挙行することになった。勝敗は別として、その試合を一つの契機に何百人もの人達が互いに相錬磨する。その毎日々々の猛訓練そのものが非常に貴いものであって、そうした機会を与えて頂いたことを術科担当の一人として衷心感謝いたしておる次第です。

1. 原理を習うべきこと

先ず初心者には素直に原理を習って、そのとおりに正しく、大きく、柔らかく、しっかり稽古することが大切です。ちょうど数学の公理、定理や、物理学の方程式や、国語の文法や、囲碁の定石を学んでかかるのと同じである。書道を学ぶには第一に座り方、墨のすり方、紙ののべ方、筆の持ち方、懸腕直筆から始めるように、剣道も学ぶにはまず心の置き所、目のつけ方、体のあり方、脚の運び方、竹刀の持ち方、構え方、攻め方、防ぎ方など技の原理を習わなければならない。

それには指導者の示すとおりに忠実に守ることが肝要である。この原理の上に立って興味深く練習する間に、四肢五体がこれを覚え、着々と進境があらわれてくるものである。

1. 沢庵和尚の間不容髪

かなりの進境が認められるようになれば、技そのものにも自然うまさが増してくる。反射神経も有効に働くようになってくる。昔話ではあるが、寒山和尚があるとき雨もりがするので雨桶を持って来いと二人の小僧に言いつけた。利口な子は台所へ行って時間がかかったが雨桶をさげて帰って来た。少し利口でないもう一人の小僧は、瞬間ハイと言って横のザル籠を差し出した。和尚はそのザル籠を出した小僧を賞めたのである。すなわち剣道においてもとっさの行動は大変必要なことである。

少し高度になってくるが、沢庵和尚が柳生但馬守に与えた不動智神妙録の中で、「間不容髪」との諭えがある。即ち間とは物を二つかさね合う間へは、髪筋も入らぬという意味で、例えば拍手を打つと瞬間に音がする。打つ手の間へは髪の毛ほどのはいる間もなく音がする。手を打った後に音が間をおいて出てくるものではない。打つとそのまま出るのである。その時のように相手に隙があれば直ちに打ち込む。「向こうの打つ太刀と我が働きとの間へは髪筋も入らぬ候程ならば、人の太刀は我が太刀たるべく候。禅の問答には此の心有る事にて候。仏法にてはこの止まりて物に心の残る事を嫌い申し候。故に止まるを煩惱と申し候。たて切ったる早川へも、玉を流すように乗って、どっと流れて少しも止まる心なきを尊び候」と懇切に教えている。

1. 徳川夢声と知己

反射神経の早い遅いは人によって違うが、剣道の竹刀の使い方、体の働き、心の用い方も人によってそれぞれ異なってくる。徳川夢声氏は中学生の頃、ひと時剣道部へはいつておったので相当の心得はあるが、剣道の事に関してこう言ったことがある。「剣道をやって非常に得る所があったのは、自分の性格がハッキリ分かったことである。私という男は、

試合をしていてもこっちから打ち込むことは滅多にない。専ら受け太刀専門みたいである。そして私には打ち込むよりも受け止めた方が愉快らしいのである。その後私の処世法をみると、仕事にも私は受ける方ばかりである。打ち込む時はいつも仕方なしに打ち込むようだ。人間には攻めが得意の人種と、守りが得意の人種とがある。私は剣道や囲碁によって自らの本性を知らされ、守りの一生を送ったのである」と。正に夢声にして言える立派な哲理ではあるまいか。

人は人によってそれぞれ違う。剣道もまた囲碁と同じで、その人の本性が丸出しにあらわれてくる。即ち立派な性格の持ち主は正しい試合をし、姑息な人はいやらしい試合をする。また元気な者は気合いのかかった働きをし、内気な人はおとなしい働きをする。そこでこれ等により自己を知ることが出来ると思うが、そうした自分の欠点短所を先輩に指摘されたときには、寧ろ喜ぶ位の気持ちでそれを素直に受け入れ、それを身をもってなおし、人間向上へのひとつの材料とされたらと思うのである。

1. 吉葉山の努力

剣道の上達には素直さはきわめて大切な要件の一つであるが、昔から`心正しからざれば剣また正しからず`の教えがあるとおり、心正しいことは人間にとって必要欠くべからざるものである。しかし幾ら正しい心の持ち主であったとしても、努力しなければなんにもならぬ。

つい先般の読売紙上に「ハダカー刀流」と題して、剣道の稽古に汗を流す吉葉山の写真が大きく載せられていた。なんでもひと月位前から、主治医の東京医大佐藤博士の勧めで歩行訓練を敢行、毎朝午前三時起床、本所一皇居前一愛宕山一本所のコースを二時間二十分であるき、有名な愛宕山の石段を上がり下りしているそうである。足に自信の出来てきた彼は、今度は剣道五段である佐藤博士の指導によって、ハダカのまま剣道の稽古を始め、今では佐藤博士をふっ飛ばす勢いで、「秋場所までに十分な体になって、十五日間を思いっ切り暴れ廻る」と張り切った吉葉山のお胸に打ち込む姿であった。私はその写真を見て胸を打たれ、吉葉山の涙ぐましいそうした精進に対し心から敬意を払ったものである。

竹刀で打つ手の小わざなど問題ではなく、足腰のバランスの確実に整った心気力の一致、そうしたものが大きな気分転換となって、秋場所にはさぞ立派な相撲を展開してくれるにちがいない。天下の横綱たるもの見栄や外聞を捨てての努力であろう。吉葉山剣道に汗を流すの写真は、そのまま私への激励の尊い鏡として、大切に切り取ってしまっていることは勿論である。努力、努力、そして努力か！

1. 孫子の兵法

千葉周作の作った`気は早く心は静か身は軽く、眼は明らかに業は烈しく`という歌がある。これに限らず多くの剣道を説いた歌は、読めばすぐ内容が諒解出来るものであっても、実際には中々行えないものである。それが本当にやれたら一流だ。

これと軌を一にするもので、若い時に覚えた孫子の兵法中にこういうものがあった。

`捷きこと風の如く
静かなること林の如く
侵すこと火の如く
動かざること山の如し`

これは剣人の心得を諭してあますところなく、人生にとっても大いに活用しなければならない大切なことだと思う。

座右の銘として今もなお心に深く刻んでいるこの教えを、あえて剣道修行中の警友諸賢におおくりして、今後のご精進に対する餞といたしたい。

（術科を推進しよう、より 警声三九号 昭和三二年七月）

「間合」について

植田 一

本日は間合について私の考えていることを申し上げたいと存じます。

剣道における間合というのは、簡単にいうと相手と自分との距離であります。さらにそれを分析いたしますと、距離と時間と虚実+ α の総称でありまして、要は打突すべき間隔をいうのであります。

距離

第一番目の「距離」というのは、彼我竹刀をとって相対したとき、一步踏み込めば直ちに相手を打突し、一步退けば相手の竹刀をはずすことが出来る。いわゆる一足一刀の間合、つまり通常六尺といわれておりますが、これは竹刀の長短とか、進退の遅速、各人の体格、精神の鍛練、技の熟否等によって異なるべきで、必ずしも一定にすることは出来ないと思っております。また練習内容によっても変わるのが普通で、こうした距離というのは三つに分けて考えることが出来ます。

即ち古来から剣道には「三つの間合」という教えがございます。初心者に対する場合、お互い同士とする場合、試合のような場合の三つの場合であります。①の初心者と相対するときは、間合を近くして種々の技術を試みて錬磨するのがよいとされています。間合を近くしても相手を圧迫し通すのではなく、相手にも稽古が出来、自分も稽古出来ることが肝要で、たとえ段が数段違っていても、やりようによっては結構お互いの稽古になると存じます。②の同格の者とするときは、一足一刀の間合をとって心を残さず失敗を顧みず十分に働き、目的を現在におかず、将来の大成を目標に、一生懸命打込む機会と打込む技の練習をなすべきで、③の試合のようにその時が大切な場合は、やや間合を遠くして直ちに打突の届かぬ位置にあって相手の起こるところ、退くところ、はずれるところを打込み、相手が出れば自分は退き、相手が退けば自分が出るというように、間合を十分注意しておれば容易に打たれることがなく、そうして相手の尽きたところ、隙を窺って勝を制することが出来るのであります。

これが即ち三つの間合であります。私の父も四国の高松で一生を過ごしておりまして、天下の持田、斎村、小川という先生方と試合をお願いできていましたのも、この間合の掛け引きが田舎の練習において生かされていたのだらうと思われま。亡父も戦前九段範士の称号を頂いておりましたが、その練習ぶりをみてみますと、初段の者とやるときには初段か二段ぐらいに、三、四段とやるときには、四、五段ぐらいに、六、七段の者とやるときには七、八段ぐらいに自分をおいて稽古をしていたようでございます。それがため相手は大木にぶつかるような気持ちにならないで、初段の者も五、六段の者も一様に父に対して飛びかかって汗を流していたようですし、父もまた二束三文の稽古をしないで、結構十分な稽古が出来ていたのだと存じます。我々同様、地方におられる大部分の皆さん方は、この距離のとり方をよく考えられて、ご研究になれば大変いいことと思われま。

時間

第二番目の「時間」とは、打突する場合、竹刀の運用に要する時間と、体を運ぶに要する時間とをいうのでありまして、相手を打とうとするとき、竹刀をふりあげて打ちおろすその時間でございませ。間合の遠い際は相互の距離を接近せしめて、竹刀の届くところま

で体を前進させて打つのでありますが、これに要する時間が間合であります。

私も戦前昭和十四、五年頃だったと思いますが、教士号をいただく二、三年前、いつ時、横面（半面）が得意の時代がありました。試合の時ですので、相手と竹刀を合わせているときはちょっと剣尖は離れていますが、遠い方の間合で、これから横面を打つのですから、距離的にいっては現在の位置から左足を踏み出しただけでは横面は届かないので、盗み足と申しますか、右足を少し前に踏み出し、その踏み出した右足を軸にして、左足をさらに大きく踏み込んだ横面をいったものです。これが実に良く当たった時代がありましたが、その機会は相手が小手を用心して剣尖が少し下がるとき、その機を狙って今の要領で横面に出るのですが、その相手の剣尖の下がるときを見越して右足、さらに左足、そして同時に横面に出る。これが全く一つの目的のために時間をうまく按分する。こうした打ちは、さきに申し上げた距離と時間とを測定に入れての間合いだと思えます。

剣道の試合で、その打つ時間は最も早いのがよい場合と、必ずしもそれを必要としない場合とがございます。

かつて陸連の大島謙吉氏のお話をお聞きしましたが、その記憶にしてみてもし誤ちがなければ、野球の場合、投手のボールが手を離れてからキャッチされるまでに 0.55 秒（アメリカ十人の選手の平均）、バッターがバックスイングしてからホームの上をバットが通るまでがまた 0.55 秒、それで球の球質を見抜いて打てるのがスピードの優位性をもっていることになり、勘のいいものとなるのであります。また陸上競技において 100 メートルを走るとき、ピストルの音を聞いて行動を起こすまでに 0.7～8 秒かかるのが、なれた一流選手になってくると、0.4～5 秒ぐらいでできるのだそうであります。

剣道でも百三、四十刃の竹刀をもって相手に打ち込む、もちろん早いに越したことはないでしょうが、野球のピッチャーが速球だけでなく、チェンジ・オブ・ペースで強打者を簡単にうちとる。そのように剣道も早い技の中に、また相手とのタイミングを考えた時間が、本当の相手に対する時間的な間合だと言えましょう。

父の話をよく出して恐縮ですが、私の亡父と私が稽古をやってあって、父が上段で私が中段の場合、父の上段からくる面がこちらにもわかりきっていて、しかも何もなすことなく面を打たれる。本当に早い面ではなくゆっくり飛んでくる面であって、それがまたまことにうまく当たる。これなどはこの時間的な間合に、次に申し上げる精神作用が影響していたものだと考えられます。

虚実

第三番目の「虚実」とは精神作用上のことで、その緊張と否とによって打つべき間（空隙）の生ずることを言います。剣道では「敵より遠く、我より近く間をとれ」と教えます。これは姿勢についても構えについてもできるけれども、多くの場合、心持ちによるものです。即ち虚をつき実で押さえる場合であります。相手の出端、引き端、或いは起こり頭、技のつきた場合などは実より虚に、虚より実に変わる刹那で、打突に最も大切な間合であって、この場合、相互の距離に甲乙はないが、利・不利からみれば我より近く敵より遠いということになるのでございます。

勝敗というものは一は間合によって決するものであって、竹刀の長短や、身体の大小、力量の強弱などによるものではなく、機に処し変に應ずるのが間合の極致であって、剣道修行の大部分は殆ど間合いの研究であるといっても、決して過言ではないと思うのであり

ます。一刀流の伝書の中にも、「勝負の要は間にあり、我れ利せんと欲せば彼も利せんと欲し、我れ往かんとすれば彼また来たる。勝負の肝要此の間にあり・・・」と書かれています。

「+α」

最後に「+α」といたしまして、虚実ではないが矢張り精神作用上のことで、間合に影響することがございます。その一つに気品とか気位というものがあります。人と向かい合って話をしても、人物の出来ている人にはなにか気押された感じがいたします。そうでない者に対してはなんらそういうことを感じません。むしろ気楽に対することができるのであります。

私が常に尊敬しているここにおられる小沢先生と向かい合ってお話を伺っていると、なにかこうその人格に打たれるものがあります。剣道具を着けて先生とお稽古をお願いしていても、やはりそこに先生の風格からにじみ出てくる圧迫感というものを感ずります。そうしたものが剣道、いわゆる狭義の場合の竹刀を合わせている剣道の間合から、また違った間合を作り出してくるもので、小沢先生は常と少しも変わった間合ではないが、私は間合のとり方が大変狂ってくるのであります。こうした人間的幅の広さ、人格の深さが必要となってくるのは申すまでもございませぬ。

次に会場の雰囲気であります。例えば私は今までに大きい試合では、戦前宮内省の済寧館、明治神宮の日本青年館、満州国新京の神武殿、北支天津の武徳殿、戦後では蔵前の国技館、両国のメモリアル・ホール、外苑の都体育館等でそれぞれ試合をしましたが、いずれも自分が常に練習している警察の道場とは構造が大変違う。つまり普通の道場は会場にひっついてすぐ横に壁とガラス窓がある。そこでその雰囲気になれている私は、蔵前の国技館のような（第一回全日本選手権大会のときであります）試合場から擂鉢式に見物席があって、そして横の壁ははるか向こうにある。また都体育館のように大きいドームのような会場で、試合場から離れて見物席が一階、二階とあって、窓はこれまた大分離れて向こうの方にある。そうした所で試合をするとき、必ず常と異なった雰囲気を感じ、そこに間合の齟齬（そご）をきたしてくるのは極く自然であります。

ただ今の会場は構造上の雰囲気ですが、もう一つ観衆の雰囲気がございます。私、一昨日東京へ着きまして、相撲の本場所初日のテレビを見ておりますと、中入り後になってようやく熱をおびてくると、入幕してからまだ間もない連中は、観衆の雰囲気におされて相当堅くなっている。それが三役どころになると、土俵上に上がって四股を踏み、蹲踞（そんきょ）し、塩を撒くその動作一つ一つにも興奮している雰囲気にとけ合った、心憎い程のタイミングのうまさを感じられる。それがさらに若の花、栃錦の横綱級になると、こんどは自分の動きで観衆をひっぱって行くだけの貫禄と落ち着きが備わって、反対に観衆がひきずられて一つの雰囲気をかもし出してくる。なかなか立派なものだと思いましたが、剣道の試合も同じで、見物席をひっぱって行けるだけの実力が出来ればもう大したものだと存じます。こうした雰囲気というものをあらかじめ計算に入れて、それをうまく活用するところに、試合者の試合なれというか、うまさを見受けるわけであります。

要するに間合というものは、あらゆることに生きてこなければならぬものだと思います。逮捕術においてもそうであります。ここに私の県から来ている上杉五段がおりますが、そ

の上杉君が二年程前、犯人を追跡して追いつめたとき、犯人とは二メートルの間合いで^{たいじ}対峙しておりました。逮捕術訓練でも警棒対あいくちの技にかかるときは約二メートルということになっていますが、この場合も全く同じで、これは上杉君にとって最も適切な間合であったからで、あいくちを手にした犯人を一喝、制圧逮捕することが出来ました。これらは真剣勝負における最もいい間合だと思われま

す。生意気を言うようではありますが、我々道場で剣道をやっているものは、ただ道場内だけの剣道におわらないで、そのきつい毎日の修練を通して鍛え磨かれる精神が自分の人格と結びついて、社会生活に顕現されてゆくものでなければならぬことは申すまでもございません。

間合についても、それが人生のあらゆる面に生きてこそ本当の間合がわかったと言い得ましょう。

私が下手な話を長くすると、そろそろ皆さん方も退屈を感じている頃です。ここらで話を打ち切って、早々に退散するののも一つの間合かと存じます。どうも大変失礼いたしました。

34. 7 けいせい51号

審 判

植田 一

人を審判するほどむずかしいことはない。また審判される方にとっては、その判決は絶対である。ここに審判の神聖ということが言われているのであるが、昨今の審判は剣道の場合、それが最も適切に申し分なく取り行われているであろうか。

私は過去数多くの試合をして来たが、審判員のどうかと思われる判定により、敗けた苦い経験を大会で二回ももっている。こんなことを言ったり筆にしたりすることは、私は生まれてはじめてのことであるが、本日は遠慮なく書いてみることにしよう。

実戦においては、その勝敗は相互間に決せられるものであるが、普通の試合では第三者の審問判断により、これが裁決せられる。その第三者を名付けて審判員というのであるが、この審判者は試合者に対して絶対の権威を有し、神聖にして犯すべからざるものとされていた。それゆえ剣道修行者は、その判決にはたとえそれが明らかに誤審であっても、異議を申し立てることは許されず、また申し立てようなどという気持ちは起こさないで、ただ自分の胸にだけとどめて、一人せつない思いをしたものである。

私の場合、その一つは昭和九年の天覧試合高松予選であり、今一つは二十八年の全日本選手権準決勝戦である。この二つの出来事はその他の優勝したもろもろの試合以上に、私の忘れられない思いとなって、今もなおまざまざと記憶の中にとどまっている。

昭和九年の天覧試合は皇太子殿下ご誕生を祝しての試合で、そのころの私は勝負の最絶頂期にあり、この天覧試合出場を賭けての高松予選であった。八戦全勝の私は最後のところで左の拳を打たれ、苦杯を喫したのである。天覧試合といえ、その当時われわれ剣道をやっているものにとっては最大の夢、それがあたら誤審のために出場出来なくなったことは、いかに二十一の青年を悲歎の涙にくれしめたことか。

第二回目はつい最近の昭和二十八年、東京蔵前の国技館で開催された戦後初めての全日本選手権試合である。無事準決勝に勝ち進んだ私は、愛知の榊原選手と対戦した。そのとき榊原選手が面に来たのを私は頭上で受け流し、右腕を打ち返したのであるが、審判員はそれを見分けられず、当たっていない相手の面に手をあげた。（このことは試合当夜の懇親会で大問題になったらしい）、榊原選手はその試合が終わってすぐ、また優勝戦が終わった後と二度私のところにやって来て「さっきは本当にすみませんでした」と、普通であれば優勝の美酒に酔っていていいはずの、選手である彼がしんみりというのである。私はその一言でもうなんにもいうことはなかった。むしろそうした彼に優勝のお祝いを心から送ることが出来た。もしあるとき私が勝っていたら、あるいは審判の誤審がなかったなら、ただ普通の同好の士としての彼しか知らなかったであろう。それが私が敗けたお陰で、思わぬ彼の素直な美しい人間性に触れ、勝った以上のうれしい心情を味わったものである。だがしかし、それにより誤審という間違いが決して割引されていいものではない。日本最高の選手権の審判にしてこれである。地方の小さな試合で、果たしてそれがうまく行われているであろうか。地方へ行くほど不十分であることはいなめまい。異議の申し立ては出来ないという試合規定に甘えすぎて、おそらく幾多の失望を若き剣士たちに与えているではあるまいか。

いつも国体などの審判に行って思い当たるのであるが、地元の歓待と久方振りの剣友仲

間の会合で、痛飲その度をすごし、翌日の試合審判に冴えない目付きの人が何人かいる。また地方の大会では、実力なくして審判だけやりたい人をよく見受けるのである。これで果たして立派な審判がつとまるのであろうか。そうしたわが身を振り返ってみて、審判することもなかなか大変なことだと思う。

私は常々審判員というものは、十分に試合規定、審判規定をわきまえて、あらゆるケースの場合を考え、その運用をあやまらず、試合者の心の動きまで見てとって、正しい判決を下すだけの絶対の確信をもてるよう、勉強を続けていかなければならないものだと思う。試合者は日一日と進歩しているのである。ひとり審判者が過去の経験だけを頼って、努力を怠っていいはずがない。技倆にしても人格にしても、その任にあらざる者が、人を審判するという法はないのである。

(四国新聞社 `月曜随想` 昭和34年10月26日)

昇段祝賀会あいさつ

植田 一

このたび私昇段いたしましたことについて、早速皆さん方からお喜びの言葉を賜り、又本日はなにかとご多忙の中を、県知事さんを始めかく多数同志ご参集いただいて、祝賀会を催し下さいますことは、私にとって洵に感激に堪えないところでございます。

私が今回この榮譽に浴しましたことは、全く皆様方のお陰で、父がよく申ししていた、日頃稽古している相手が即ち自分の師であるという言葉をしみじみと思い浮かべながら、心からお礼申し上げたい気持ちで一パイであります。もとより鈍才未熟な私、今後益々研鑽努力して、今日のご芳情に添いたい決心でございます。

ここで若し私に、剣道に対する最近の心境につき一言触れることをお許し頂けるならば、私はこの頃剣道の稽古、試合自体においても「和合一体」ということをしきりに考えております。

文字どおり相手と自分と解け合って一つになるということでございます。つまり相手を打ってやろうと意気込むのではなくて、相手の中へ入り、また自分の心の中、動きの中へ相手をひき入れて来る。そこには決して無理がない渾然一体の姿で、ここにおいて始めて真の技が生まれてくると思うのであります。

柔道の三船十段はマリの原理を柔道で説いておられます。即ちマリは倒れることがない。マリの如く重心を移して転じおれば、絶対相手に投げられることはないという意味でございます。

剣道にも無理は決していけない。自分だけの剣道でなく、「和合一体」の状況において剣の道を行すべきだということを、最近になって私は私なりに考えてみるようになりました。

齢五十に漸く手が届きかけて、動作そのものは次第に鈍くなって参ります。これをなんとか精神面で補い、さらに剣道に修行に突き進みたいというのが私の最近の心境でございます。

どうか皆様方、今後とも今までどおり私の師となり友となって、どうかご叱正ご教導を続けて下さいますよう、説に心からお願いいたしてやみません。

最後に本日のご厚情を重ねてお礼申し上げ、私の挨拶の言葉といたします。

どうもありがとうございました。

(剣道八段昇段祝賀会にて 昭和三十八年六月二十二日)

一源三流

植田 一

何年か前静岡で行われた国体に参った節、剣道試合会場である三島高校に新しい剣道場が出来ていました。

道場の入り口に「源流館道場」と看板がかかっている、私はこの土地が源氏発祥の地であるところから、斯いう名前がついたのではないかと考えていました。

ところが道場に足を踏み入れてみますと、先ず一番に目についたのが「一源三流」と墨書された大額です。同行の全剣連木村会長が如何なる意味かと校長に尋ねましたところ、校長はこれは先々代の校長の書で、「国の為に血を流し、家の為に汗を流し、友の為に涙を流す」この三つの流れのような人間を作りたいという意味を説明してくれました。私達はこれを聞かされて心から嬉しく、頼もしく感じたことは申すまでもございません。

一源というのは「誠の心」でありまして、誠の心を中心として、三つの流れを実行出来る真の立派な人間に仕上げたい、というのが校長先生のおっしゃった意味だろうと私は思っています。

そこで私は、その後今日にいたるまで、よくこの言葉を頭の中で思い浮かべては、私なりに私の心を戒めております。

第一の「国の為に血を流す」とは、なにも戦争とかクーデターとかそんな血生ぐさいのではなく、私は結局本当の祖国愛だと解釈しています。国がたつか亡びるかのとき、国のために命を投げ出して働くことぐらいは当然なことで、国家あつての国民です。平和な時においても、日本人としての誇りを持って毎日を行行動する、国のために働く、この祖国愛を失ってはならないと思います。

第二の「家の為に汗を流す」、これは普通誰でもが出来ていることでしょう。自分のため、家のために頑張るのは当たり前のことですから。

第三の「友の為に涙を流す」、これが一番むずかしいのではないのでしょうか。友のために涙を流してやれる人間になれば立派なものです。利己主義に陥らないで、苦しい時、悲しい時に一緒に涙を流し、激励し、頼りになってやれる人間に私はいつもなりたいと願っております。人を愛す、こういう気持ちになれば、毎日の新聞を賑わしているつまらぬ傷害事件など起こり得ません。

剣道は人間完成を目的とするもので、その修養の道程において、「心を修め」、「気を養い」、「体を整える」ことに十分心をいたし、「誠は天の道也、之を誠にする人は人の道也」、古人の教えを実戦出来たらとつくづく考えております。

(小倉編集長の依頼にこたえ、大川地区法人会会報`あしなみ`二四号に
昭和三九年六月)

長官への私信（昭和 48.12.12）

植田 一

ご無沙汰しております。

過日、全国大会では大変温かいご高配をたまわり、今日なお感謝を続けております。

ご多忙の中優勝戦をわざわざご観戦頂き、その上、閉会式でのあの心を打つ有難いお言葉、私にとってこれ以上受けた強い感銘はございません。

警声年末号（一二月二十日過ぎに出来上がります）に剣道第一部準優勝の記事が掲載されます。

長官の閉会式でのお言葉が強く影響し、特集となりました。その中で本来であれば私が真先に長官のことを書かねばならぬわけですが、課長、選手たちも筆をとることだし、重複する上、私が書いて手前味噌になってもと、不本意ながら敢えて遠慮させていただきました。

目標どおりの念願であった第一部制覇はできませんでしたが、全国第二位となり、約束の高橋長官から直々選手に銀メダルをかけて頂き、しかも予期しなかった「香川県に優勝させてやりたかった・・・」とのお言葉、全くあれを聞いた瞬間肅然として、「ああよかった」としみじみ心に繰り返しながら味わったものです。

長官、本当に有り難うございました。無理を申し上げ、それを気持ちよく受け入れて、予定でなかった閉会式に残って下さった長官のご厚情、ただただ頭が深く下がります。

最近各県から、訓練はどのようにして指導しているのかとの電話の問い合わせが参ります。

私は、「選手は仕事の合間を見ての練習だから、よそ以上には訓練は出来ていない。ただ私が剣道の指導者として将来に残したいものは、選手の剣道修練を通しての社会に対する姿勢である。さすが剣道の選手であると警察のみならず、県剣道界からも信頼、尊敬される人間を作りたい。それ故、精神的なものは何時もやかましく言っており、今、仕事や人物で誰を見ても模範的な全選手を、私は心から誇りに思っている。また七人の選手五名まで巡查部長の試験をいい成績でとって、そうした各人の努力と自信がチームのカラーとなり、剣道のわざの上にも大いに生かされているのではなかろうか。小県香川を意識している者は一人もいない。もちろん練習は私一流の厳しいものだが・・・」と、生意気のようなのですが返事しています。

これも高橋長官のご期待に応えたい考えからの私の信念となっております。

どうか今後ともご叱正、ご教示のほどをお願い申し上げます。

実は昨晚、文芸春秋正月号を読んでいて、長官ご執筆の「タルと娘」を見つけました。家内ともども拝読させて頂きましたが、それにしても私一人で世田谷のお宅へお邪魔して、お寿司のご馳走を頂戴したとき、小学生か中学生であったテレビを見ながら勉強していたあの可愛かったお嬢ちゃんが、成人してもうお嫁さんに行ってしまったのかと、その華燭の典のお目出度を心から寿ぐとともに、早い月日の経過にびっくりした次第です。

父親としての、愛娘を育てあげ嫁がす満足とわびしさがよく現れていて、親としての尊い心に胸打たれました。

私たちでも、やはり師範と選手は心のつながりが第一ですね。そこには信仰的なひきつ

けさえも必要とします。それだけに師範としても選手以上に努力いたさねばと存じております。

”スマートになったタル万歳！！”と読後の一筆を差上げようと思っていたのが、全国大会の方へ筆がすべりました。

これ方寒さも厳しさをますます加えて参ります。

国内外の重大事局にあたり、極めてご繁忙のおり、くれぐれもご自愛専一に。来年もどうかお元気で。

ご尊宅皆々様に何卒よろしく。

ご多幸を衷心祈っております。

(注) 高橋長官は香川県隊長時代、県剣道連盟会長をお引受け頂いておりました。

亡父、平太郎顕彰除幕式の挨拶 (S42.7.25)

植田 一

本日は何かとご多忙の中、殊に酷暑の砌にも拘わらず、金子知事さん、新田先生、近藤先生をはじめ、来賓、剣友多数ご参列のもとに、亡父顕彰の除幕式を挙行下さいますことは、私たち遺族にとりましてまことに感激に堪えないところでございます。

十年一昔と申しますが、父が逝って満十八年を過ぎました今日もなお意にかけられ、北は北海道から南は九州の果てにいたるまで、全国の皆様方からお心のこもったご芳志を賜り、かくも立派なレリーフ並びに顕彰の碑文をご掲額頂きましたことを、衷心有難く御礼申し上げる次第でございます。

東京におられる持田、斎村両十段が現在もなお折にふれ父を例にとり、「剣道の修行は地方においても、都会以上に立派に出来るものだ……」ということの後進の人たちに訓されているそうでありますが、そうした点を考えてみますと、父が修行いたしました剣の道は、日常生活を通じて極めてきびしく、私などの到底及ばないところでございます。それとともに大切なことは、父が常々申しておりました「自分が稽古している相手が、即ち自分の師（先生）である」という言葉であって、自分と共に修行している後輩、若い人たちに対しても、常に感謝の念をもっていたという一事です。こうした修行態度は、私自身大いに参考にいたしたいと考えております。

「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」とか申します。至誠一貫、誠をもって一生を貫いた父が、心身錬磨の殿堂であるこの武道館で、しかも常日頃敬愛していた皆様方に囲まれ、命日である本日、自分の顕彰額を掲げて頂いたことを、父は心から欣ぶとともに、非常に恐縮いたしていることと思います。

遺族の私共も、この皆様のご芳情を心に刻み、今日の行事を傷つけないよう、今後とも益々研鑽努力して、精進を重ねる積もりでございます。

甚だ訥弁で意を尽くせませんが、以上申し上げまして私のお礼の言葉といたします。

どうも本当に有難うございました。

(県立武道館での式典後、体育館における祝賀会で)

幸福な父(植田平太郎伝 S43.9.25)

植田 一

このたび元朝日新聞、香川新報記者で、小生が高松中学時代の一年先輩にあたる著述家山田竹系先生が、父の伝記編纂にご尽力下さり、諸先生、諸賢方から心のこもった玉稿を頂いているようで、跡を継ぐ者として衷心有難く感謝いたしている次第です。

父の剣道のことについては、私自身三十五才頃まで共に暮らし（父が亡くなるまで）、ことごとく薫育を受けていながら、何らそれを吸収、実戦出来ず剣道における父の非凡さに今さらながら驚いている始末。

拙著「流れ星」の中で、剣の道に対する父の徹底した考え方なり、技の分析については多少触れておきましたが、何かの機会にまとめて見ると多くの剣友たちに促されつつも、甚だ奥手の方の小生、筆をとれるのは何時のことに相成りますことやら……………。

足の神経痛がよくなり（昭和十九年頃）、病床を離れ家の表まで出て来て撮り、私たち戦地にいる子供たちに、手紙と一緒に送ってくれた髭をのばした写真が、昨年皆様のご厚情を受けた顕彰碑レリーフ型のもともなったものです。

昨年夏このレリーフが、県立武道館の壁に立派に飾り掲げられて以来、各地の先生方が沢山この武道館へお見えになって、ご覧下さっております。殊に先月東京と兵庫から私の尊敬する伊東祐蔵、松本敏夫先生が、それぞれ社用でご出張中の寸暇をさいて、わざわざ顕彰碑の父に会うためお立ち寄り頂いたことは、それが丁度命日（七月二十五日）の数日前とて、稽古直前の私ども感激をひとしお覚えたものです。

厳しい道への追究と、熱烈たる指導の自己加虐から自らを解放して、時たま一本の酒（約一合）を飲んで赤くなり、寝ころんで`ここは朝鮮北端の…………`と、鴨緑江節を口ずさんでいたご機嫌の父を今も懐かしく思い出します。

父についての思いでは数限りなくございますが、前著「流れ星」巻尾に、父と母にこの小冊子を捧げます…………とあるとおり、父のために一生を尽くした母も私たち子供にとっては永久に忘れることが出来ないものです。

母というもののあり方を、毎日の行動のなかに身をもって示してくれた母の点をつけよと言われたら、百点満点をつけましょうとそのとき書きしるしてあります。

そうした私たち子供の誇りである母に、妻として一生側にかしずかれ、噂も七十五日、去る者日々に疎しと言われる世の中で、十年一昔どころか、二昔もたった昨今、今年と引続いて、顕彰碑、伝記と父のことを思って下さる全国各地の尽きない、交剣知愛の温情に抱擁され、好きな剣道で一生を過ごせた父は、生前はもちろんのこと、死後もつくづく幸せな人であったと、私は心から思っております。

剣道範士受称祝賀会並びに 欧州訪問使節歓送迎会における謝辞

(ホテル末沢 S44.8.16)

植田 一

さき程来、まことに鄭重なるお祝辞を賜り、恐縮の至りでございます。

甚だ高い所からですが、お許しを願って、一言お礼のご挨拶を申し上げたいと存じます。

このたび私が剣道範士の称号を授与されましたことについて、早速、全国の先輩、剣友各位から歓びの手紙を頂き、また本日は何かとご多忙の中を、県知事さんをはじめ、多数の来賓同志ご参集のもとに、殊に東京からわざわざ小西先生のご来駕を得て、斯く盛大に祝賀の会をお催し下さいますことは、私にとって寔に感激にたえないところでございます。また只今は、お心のこもった何よりの記念品を頂戴し、厚くお礼申し上げます。

私が今回この栄に浴しましたことは、全く常々から金子会長さんご庇護のもと、温かい理解をもって見て下さった勤め先上司の方々や、日頃稽古のお相手を願った皆様方のお陰だと、衷心から感謝申し上げたい気持ちでいっぱいであります。

もとより鈍才未熟なる者、今後益々研鑽努力して、今日のご芳情に酬いたい決心でございます。

たしか六年前、八段允許の祝賀会で、私は「和合一体」について愚見を申し述べた記憶を持っておりますが、剣道に対する私の最近の進境につき触れることをここで再びお許し頂けるならば、私はこの頃「温故知新」ということをいろいろと考えております。

即ち、`古きを温めて新しきを知る`であります。これはただに古えから伝わった教訓だけにとどまらず、今日生を受けている我々日常の心構えにも通ずると思うのであります。

古きに失しない、新しきにかぶれない、絶えず過去と前途を正しく見つめて進んでいく。これが真の「温故知新」であり、また剣道そのものにとっても大切な考え方であろうと思っております。

少にして学べば壮にして為すあり、

壮にして学べば老いて衰えず、

老いて学べば死して朽ちず。

この古人（佐藤一斎）の言をよく守り、自らの精進を続けるとともに、「温故知新」の心構えを持ってこれからの青少年育成指導に当たりたい。これが最近の私の進境であります。なお、来月上旬使節団として参ります欧州八か国訪問においては、出来るだけ見聞を広めると同時に、正しい日本剣道の紹介普及に努めてきたいと考えております。

今後とも何卒宜敷く御指導の程をお願い申し上げます。

最後に本日のご厚情に対し重ねてお礼を申し上げ、私の挨拶の言葉といたします。

どうも本当に有難うございました

兵法者落第の弁（けいせい116号 S45.12）

植田 一

温度がさがる日、足の下に湯タンポをおくことにした。

神聖なる職場でいささかどうかと思っているが、これが私の仕事を活かす上にも役立つものであると自ら弁解している。

昭和三十九年、国体四国予選試合の審判中、思わず臍（すね）に電撃の如きものを受けて倒れたことがある。

戦前、学校勤務中は、毎日授業三時間以上、放課後の選手指導二時間、武徳殿之稽古参加一時間半と、若い者相手に連日烈しい剣道に明け暮れ、足腰をつかい古していたわることを行ななかった報いである。

真冬になり、全然日の当たらない教養課の部屋では、暖房を入れて腰掛けていると、頭の方が三十度近くなっても足のところは十四度を超えたことがない。

毎年この「非情」に痛められ、冷え性と慢性腎炎をもっている私は、神経痛、リウマチを誘引する結果となった。

警察独自の訓練は今ちょっと中休みの形であるが、一般では新年早々の寒稽古に引続き、二月から四月にかけて県外から数団体が、次ぎ次ぎと高松の武道館で合宿訓練を行う予定になっている。

その目的の一つが私との稽古にあると聞かされては、私たるもの彼らに対し、最もいい躰の状態で竹刀を交えてあげることが第一だと、絶えず最高のコンディションづくりに心を配っている。

そこで神経痛、リウマチを撃退するため、湯タンポのご厄介に相成っている仕儀。

しかし師範が廊下を湯タンポさげて歩いている姿は、どうも漫画である。なるだけ人に見られないようにと十分気をつけていながら、何時も何人かの人に出会ってしまう。

「兵法は密なるを以て貴しとす」という訓えがあるが、すぐに見つかる私は、どうやら一人前の兵法者にはなれないらしい。

私の出会い（四国新聞「私の出会い」S50.8）

植田 一

「君を強く推奨するから、日本の将来を背負う若き学徒のため、是非決断されるよう」これは昭和18年十月、当時高松高等商業（現香川大学経済学部）講師兼高松商業教師であった私に、金沢の第四高等学校助教授（医大の剣道師範兼務）への転出を強く要請してきた木村篤太郎先生（当時東京弁護士会長）からの、四高校長との詳しい将来の確約まで添えたまことに熱意溢れる手紙の結びの言葉である。

私は先生の勧めに心を動かされながらも、その頃は戦争たけなわで、奉職中の学校との関係もあり、父をとおしてねんごろにご辞退を申し上げたが、私にとって、それが木村先生との直接手紙による初めての出会いであった。

木村先生はその後検事総長、吉田内閣の法務総裁、防衛庁長官と栄進され、極めてご多忙の中を全日本剣道連盟初代会長として、剣道を通じて青少年の健全なる育成に全力を注いで来られ、私もまた職務のかたわら評議員、審査員としての諸行事に参加し、直接先生から御指導ご高説を伺える機会がふえた。

長男に信夫という名をつけて頂いたり、有益な本を幾度か送って下さりしたが、私は年に一、二回木村先生のお宅をたずね、古武士の如き先生から卓見をお聞きするのが楽しみで、私の剣道観のなかに、先生の思想、信念が多大に影響していることは申すまでもない。昨年十二月、全日本剣道選手権大会終了後、九段会館で木村先生の勲一等大綬章受賞祝賀会があり、スポットを浴びた八十九翁が、これからの剣道の進むべき道を諄々と説いた矍鑠（かくしゃく）たる姿は、実に格調に満ちた、聴く者の胸をうつ剣の心の披瀝であった。

今春渋谷の新宅を訪れ、故夫人の仏前へお詣りしたおり、先生から愛用の辞典を頂戴した。それは文学博士塩谷温先生が、八十寿賀記念限定版として刊行し、「木村仁兄 惠存 辱弟温」と自ら墨書贈呈された木村先生にとっても記念の大切な新辞鑑である。

私は「心身錬磨」とある先生の書を掲げた部屋で、その辞鑑をひもとき、常に先生のいつまでもお健やかならんことを心底から願うのである。

「武道振興紙」の創刊を祝して（「武道振興」S51.10.20）

植田 一

剣道の理念 剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である

剣道修練の心構え

剣道を正しく真剣に学び、心身を錬磨して旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて礼節をととび、信義を重んじ、誠を尽くして常に自己の修養に努め、以て国家社会を愛して、広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである。

これは全日本剣道連盟が、剣道とは何であるか、また如何にすべきかを、昨年五月制定して、全国へ通達して来たところのものであります。

剣道の修行にあたっては、この理法というものを正しく解釈して、より高い人間形成を目指すものでなければならないことは申すまでもございません。

すべて道と名の付くものの目的地とは、やはりその道をとおして深い人生の真実にふれることにあると思います。

その真実を見間違えたり、目的地を見誤ったりしてはならないわけで、

例えばお茶を例にとってみますと、先ずふくさばき、茶杓のふき方から始まった作法を覚えて、形の入り口からはいってゆき、形が決まれば今度はその方に心を出さなければならないと考えます。

若し形の世界だけにとどまっておれば、茶道が単なる形式主義に陥ってしまうだけで、お茶を出す人と頂く人の温かい心の触れ合いが大切であると同様、剣道も厳しい修練の過程を経つつ、相対する相手と自らとの間に、理念や人間形成の道からずれた矛盾をなくし、渾然一体、和合の状態において行じ合うことが大切で、そこにおいて初めて人生の真実、香り高い正しい心というものが見つめられると思うのであります。

剣道有段者の数五十八万名余、剣道人口実に三百万といわれている現状下において、それが立派に脈打って、正しい血が流れているではありませんか。

その責任をつくづく感じているおり、財団法人「日本武道振興会」が高松に設立され、日本人の尊い遺産である武道全般を通じて、青少年健全育成に尽くされる趣きを承り、衷心慶祝に存じている次第で、これを機会に関係各種武道団体と手を取りあって、人間として本来あるべき真実の心探求を目標に、若き青少年指導に全力を注ぎたいと念じているものでございます。

ハカマ談義

植田 一

正月とか、何かあらたまったとき、八幡様へ詣でる紋付、袴に威儀を正した人をよく見かけますが、袴というものは、最近日本人の日常生活からは縁遠くなってきており、平生には特定の人達が用いているばかりです。しかし剣道の稽古を行なうとき、必ずといっていいくらい七、八十の老齢の方から、六、七才の豆剣士にいたるまで、皆この袴を使用しています。

およそ着物を着たこともない青少年が、ズボンをはかずに動作しにくい袴をはいて稽古する。それは一体どうしたからでありましょう。その意義を全然知らないで、ただ他の人がそうしているからというのが大方の本当のところかと思われまふ。

文部省のある事務官が、日本武道館における実業団の全国大会を見て言った言葉、「大変立派で、大いに今後とも剣道発展のため頑張ってもらいたい。だがあの袴だけは何んとか新しい形にならないものか」と。これはまた、まことに情けない。剣道のトレードマークが変なものにしか映らなかったのでしょうか。

私達は袴をはいて稽古をしています。もちろん、そこにはそれだけの理由があつてのことで、ただ漫然と意味なく昔の姿を追った、郷愁のような気持ちでやっているのではございません。

それでは何故袴をはくか、それについて少し述べてみたいと存じます。

◇王選手のハカマ

私達が袴で連想するのは、やはり婚礼のときに盛装した袴です。

巨人軍王選手が昨秋結婚しましたが、あのとき王選手がはいていた仙台平の袴は、人間国宝甲田栄佑氏が特別に織った乱れ縞模様で、この一枚で普通の袴が百枚も買えると言われています。

こんな豪華な袴は別として、日本人が昔から生活に用いていた普通の袴、それは形は異なつていても神代の時代からあつたもので、腰部から脚部にかけて下方を包む和服の一種でした。八賀萬、波加萬ともよばれ、穿裳（はきも）から転じたものですが、時代によって色々と変わってきています。

袴の構造上から見た分類

日本服飾史論によりますと、男装の袴としては、

1 表袴

礼服、束帯に用いた。

2 大口袴

束帯のとき、表袴の下に重ねて着用した。

3 小口袴

天皇内々に着用されたもの。蹴鞠のときに用いられたようである。

4 指貫（奴袴）

袴の裾を括って着用する。

5 狩袴

狩衣のときにつける。

6 長袴

直垂（ひたたれ）、素襦に長袴を用いる。

7 小袴

仕立ては指貫に似て古くからあり、直垂、小干に用い、また古くは常には素襦に小袴を用いた。指貫とともに上古の禪に淵源する民衆服であったようである。

8 四幅(よ)袴

前二幅、後二幅の仕立てで、長さは膝頭に達し、裾が狭く、初めは民衆服であったが、足利時代から下級武士が用いるようになった。

9 野袴

近世武士の野行等に用いられた。襠（まち）の高い袴に黒天鵝絨（びろうど）等の縁（ふち）をつけたもの。

10 馬乗袴

馬に跨がる必要から襠を高くしたもので、野袴とともに今日我々が式服として着用している袴の前身をなすもの。

11 平袴

長袴の短い仕立ての半袴に似て、江戸時代一般に式服として用いられた。左右の相引が下の方であって、下に着ている着物がその間から見える。仕立ては武家と町人によって異なり、襠を低く仕立てたものを町人仕立てと呼び卑めていたが、天明の頃から武家もまた襠を下げるようになった。

12 襠高袴

幕末多事に際し、幕府の施政も諸事簡便を旨とする方針をとるようになり、文久 2 年 4 月 13 日の達で、なるべく供を多勢伴れて歩くことを減らし、万石以下のものは乗馬で登城することを許可、その結果として殿中で馬乗袴を着用することが許された。それまでは軽便なこの馬乗袴は、もちろん野外の服で、式服には用いられなかったのである。

ついで羽織袴が事務服というような意味で公認されるに及び、襠高袴は羽織と相伴って野外服から室内服に昇格することになった。以後、従来は麻上下（かみしも）を着用していたところを、羽織袴、即ち平服で大概済まされることになったから、馬に乗らない徒歩の武士も襠の高い馬乗袴型の袴をはくようになり、平袴の用は次第に廃れた。維新前後は上下を着用することが全く廃れ、襠高袴は羽織と相具して、下級官吏及び一般民衆の礼服として認められるに至ったのである。

13 行灯袴

明治以降襠の全くない行灯袴が作りだされ、男女とも学生の間に変愛好された。

◇現代の袴

わが国では男子は古くから麻布の太い禪をはいていたが、奈良時代以後唐風をとり入れた表袴が作られ、中世以後、細い四幅袴、近世初期は長袴が好まれ、元禄時代になって馬乗袴が用いられた。

明治以降、男子は馬乗袴が学生用、礼装用として用いられるようになり、現在用いられている剣道の稽古袴は、平袴と襠高袴からきていると考えてよさそうです。

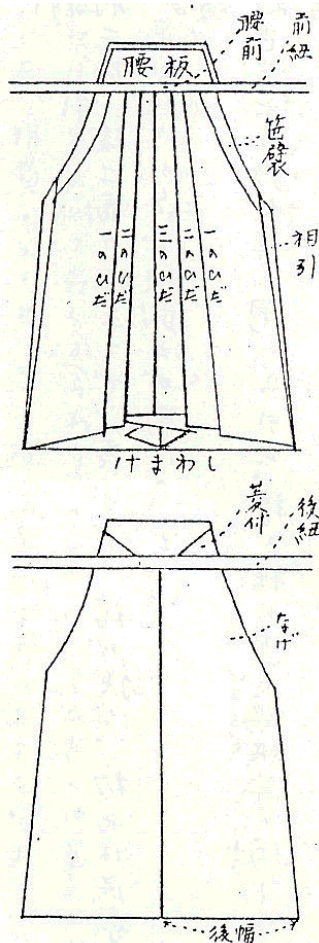
◇五倫の教え

図でもおわかりのとおり、前側から見ると5本のひだが出来ており、これは先人が袴を使用するにあたって、人間としての日常の心掛けに結びつけて作ったもので、即ち「五つのひだは、五倫、五常の道を訓したものだ」と、かつて古文書で読んだことがございます。

従って昔の人は君臣、父子、夫婦、長幼、朋友、または仁、義、礼、智、信等の道を、この袴をはくたびに頭に浮かべ、心にきざみ、折り目正しいという言葉がそこから生まれてきたものだと言われます。

また裏側から見て、1本のひだが通っているのは、二心ない誠の道を示したもので、私は日常袴を用いるたびに、その意義をよく考え効果あらしめるように使用すべきだと、何時も若い人達に話しています。

私方の警察剣道選手は、もう十何年も前から試合用の袴は申すまでもなく、練習用の袴にいたるまで、軽い霧水をかけて布団の下に敷き、すっきりと折り目のついたものを使用し、また終わってからは丁寧に畳んで道具の間へ納めておく習慣を身につけています。彼等が試合をしている姿を細かく観察すると、そうした心掛けが自然に形に現れ、正しい心、美しい姿、しかも気品をもって戦っていることがうかがえるだろうと存じます。



◇気温、気湿の調節

袴は畳んで大きく3口（上1、下2）、はくと下2口、横（両腰から下）に2つの脇窓が開くことになり、そのため夏によく、冬にまたよいことは事実誰もが体験しているところで、殊に夏期、流汗りんりの猛稽古時において、適当な窓をもち、適当な汗の吸収力をもっている剣道袴は、袴内の気温、気湿の調節が妙であって、ムレルことがなく、また放熱による両脚の冷え込みも少ないので、疲労しがたいことにもなっています。

また、袴はフワフワと軽く両脚を包んでいるため、暖簾のようで、相手の竹刀があやまって両脚に加えられても、その衝撃力は著しく減弱されてしまい、皮膚に破傷を発現するようなことはまずございません。

◇腰板と姿勢

さらに腰板が後布の上部についていて、巾広く下部腰椎を後方から圧抵して、腰椎前彎を強要し、良姿勢の基盤をつくり、ひいては下腹部を突き出すことになり、いわゆる腰をもたせることに大変役立つその効用を、我が畏敬する整形外科の権威、東大講師伊藤京逸博士は極めて推奨しているところです。

◇紐と丹田の力

前紐は長く胴を3廻り、後紐は1廻りあって、前紐、後紐の順にそれぞれを締めることによって、下腹部に力を入れやすくし、なお剣道具（私は防具という言葉は今まで使っていません。剣道の道具は打たれるのを防ぐだけでなく、鎧（よろい）のようにしっかりと正しく身につけることによって、心をひきしめるものでなくてはなりません。そうした意味において、私は昔から防具と呼ばないで剣道具と言っております。）の垂れは、これを一層強化するに役立っているようで、チャックやボタンで簡単にすまさず、袴の紐をわざわざ長くして、何回も腹を巻いて締めること、即ち諸芸道において最も重視されているところの、養気の術、丹田に力をいたす結果を招来するものだと思います。

◇ 準備運動はしなくても

竹刀をとって道場に立つまでに、私達は体のあらゆる部分を動かしていることに気がつきます。

まず服を脱ぎ、ズボンをはずし、シャツとズボン下をとる。それから剣道衣を着け、袴をはきますが、それまでには手足や首、胸等の上体を何回となく屈伸させたり、いろいろな状態に動かしております。

ついで垂れをしっかりと結び、胴を着ける。胴紐を結び終わる頃には、上体、腕、手首、指先きの運動がもう十分に出来上がっているはずで、その上、頭に手拭いを巻き、面を着けて面紐を結ぶ。これだけ体を動かしておれば、もうこれ以上の準備運動のしようがありません。あわてて竹刀を振ったり、躰をくねらしてみる必要さらさらないというわけです。

最近各種の大会を見ておりますと、道場の中であって、しかも大勢人のいる前で、変な恰好をして準備運動をやっている者をよく見受けます。

これ等の人達はおそらく剣道衣、袴、剣道具を身につけると、何んの意識もなく、また無意味に、それを済ましているのではないのでしょうか。

◇ フンドシとパンツ

先程申し述べた丹田に力を入れるといえば、昔は褌というものがあって、腹をしっかりと巻いていました。褌はただ単に金かくしだけの目的でなく、腹の力、丹田の力を作り出す大きい役目を果たしていたのです。

私は永年の間越中褌をこよなく愛し、つい先年までこれを使用しており、六尺褌で腹を締める名残りをそこに感じていた一人ですが、褌をあまり好まない家内は、数年前から、「下帯をおやめになっては・・・」と、私にパンツへ転換することをしきりに慫慂（しょうよう）しはじめました。

きみに二（ふた）心我れあらめやも・・・と、一向に効き目のない私に、家内はタンヌの引き出しの中にある褌を整理して、何枚もの新しいパンツを入れ足しておいたものです。

洗ってもらうため、洗濯器の中へ褌をほうり込んでおくと、出来上って家内の手からニコリ笑って返ってくるものは、パンツに化け変っています。まさかフリで過ごすわけにもまいらず、戦い敗れた私は、遂に不本意ながらもパンツを使用するはめに相成ったよう

な始末。

しかし、あの海水浴場なんかで、赤いシャツに模様入りのパンツをはいている若い男を見かけると、かつての日本男子いずこにありやと、全く淋しい気がいたしてなりません。

こうした衣類の推移からも、日本精神がだんだんと薄れていくような気がいたします。

◇ 袴の紐をしっかりと締めて

話は落ちるところまで落ちました。まことに申し訳けありません。ここらで締めくくりをいたします。

我々日本人は昔からの日本の衣食住、日本の言葉によって生活して来たもので、その日本人が日本の良さを失ってはならないと思います。日本人である我々は、祖先が残してくれた立派な遺産である日本精神を受けついで、日本人の象徴である袴を、せめて剣道の稽古ぐらいの時にはき続け、大いに日本人たろうと考えておる次第。

いろいろ精神上、肉体上、行動上に好結果をもたらす袴、その由来を知り、これを心して使用すれば、その利点自らにして身に及ぼしてくるというところ です。

藍の色匂う折り目正しい剣道衣袴に剣道具をつけて、凛々(りり)しく立ち上がった姿、そこには美的価値すら見出せます。

袴もまた良きものじゃありませんか。袴をはいて、大いに頑張りたいと思っております。

香川県警察機関誌「警聲」93号掲載(42年1月)

稲留四国管区警察局長推奨で「武道評論」3月号掲載(42年3月)

続・ハカマ談議

植田 一

剣道の稽古において、袴はぜったいに必要なものである。幼少の豆剣士から老年の達人にいたるまで、みな剣道衣、袴で稽古している。

袴のいろいろな効用徳目については、「ハカマ談議」ですでに発表済みであるから省略して、今回は`笹襷`（ささひだ）と`なげ`について考えてみよう。図は略す。（前記ハカマ談議をご覧ください）

図でもご覧のとおり、笹襷は外へ、なげは内側へ布地を折って袴を仕上げている。

これは人生の表裏、陰陽、剛軟、懸待、攻守、出退などを表しているものだと思う。そしてそれが別べつでなく、下の相引（あいびき）につながり、和合の調和を形づくっているのである。剣道修行の心構えに結びつけて考えてみると、非常に味わい深い教えを感じる。

ところが、この和合一体の相引となるべき笹襷、なげの長さがうまくつりあっていない袴を最近よく見かける。

これは、着物に帯を正しく結んで袴をはいたときと、素肌に剣道衣と袴をつけたときでは、当然長さの具合が変わってくることを考慮していない仕立てのためであろう。

私自身の袴を例にとってみると、身長 170 ㍎の私は、前（腰前の紐下から裾までの長さ）90 ㍎、後（腰板の下から裾まで）91 ㍎の長さのものを使用している。この長さが私の稽古袴としてはもっとも適切なもので、この場合、笹襷となげの長さ（相引の縫い合わせ目まで）は約 30 ㍎である。

この脇窓の大きさは、だいたい袴丈の三分の一とされているので、これ以上大きい開きのあるものをはくと、剣道衣の下端からももの肌が見えるし、小さいものだと袴のひだのさばきが広がり過ぎ、かっこうが悪くなってくる。

このごろの人の袴を見ていると（居合道の方たちのも含んで）、笹襷よりなげが何㍎も長い後ろさがりのものが目につく。無関心が自然に自分の姿を、締まりなくみっともないものにしているようである。

折り目正しい、藍の色匀う木綿地の袴を立派にはきこなし、毅然として立った姿、それはえも言われぬ美しさを持っている。

（剣道日本52. 1）

剣道と人間教育

植田 一

聞き手・阪根義雄

健康保持には気力が大切

阪根 非常に若く見えますが、健康法は・・・・・・・・。

植田 父からの教えでもありますが、きのうやったことはきょうもやれるということで、年を寄せることはないと思っている。また、気力を持って、若い人と毎日稽古しているからでしょうか。やっている間は年なんか忘れてしまっている。そうしたことから年より若く見えるのでしょうか。

阪根 実際に体が若いんでしょうね。

植田 自分では四十五から五十歳くらいの気持ちだ。新聞を見ると「六十五歳の老人」なんて書いてあるので、自分も老人になったのか、と思うことがある。間もなく老人手帳をくれるそうだが返上するわけにはいかない（笑い）

阪根 健康、若さを保つ秘訣は・・・・・・・・。

植田 毎日、道場で汗を流し、若い人と剣道に励めるとが年を寄せないことだ。しかし、元気なばかりではやれない。やる気力が大切だ。ときどき、他県から「稽古をしたいから」といってやって来る。そういった飛び入りでも、最高の状態で相手をしなければ行けない。コンディションには、絶えず気を配っている。剣道の専門家になったとき、「酒のまん、たばこ喫わん、遊びに行かん」という気持ちで立ち上がった。酒だけはつきあいがあるので、ビールを中ビンに半分ぐらいはのみます。日本酒は二日酔いになるのでやらない。

阪根 節制しておられるのですね。たばこのほうは・・・・・・・・。

植田 若い時から喫いません。私が二十歳のころ、人と話をするときには手持ちぶさただからタバコを喫いたい、と兄にいったところ「そんなごまかしせずに話術の勉強をしろ」といわれた。そのときの気持ちがしみこんでいる。

阪根 一日の稽古量は・・・・・・・・。

植田 午前、午後三時間やっている。午前中は試合をやらせ、午後は一時間半が指導、三十分が剣道のコツなどの講話、あと四時間は、自分も道具をつけて相手している。七段級の人とやるより若い機動隊とやるほうが疲れる。

阪根 機動隊員は三、四段の人が多いんですか。

植田 新しく這入ったものでも三段で、ほとんどが五、六段です。最高は七段がいる。県下第一線級ばかりで、十八人が稽古している。若いときは、彼ら全員相手にして試合していたが、いまは七、八人が限度だ。相手は交代してかかってくるが、私はぶっつけで相手する。

阪根 何人も相手にするときのコツは。呼吸ですか。

植田 長い間やっているのと、力を出すべきところと止めるべきところがわかっている。全力で動いているようでも、なかで休むことができる。

阪根 素人が見ていると、動きづめに動いているように見えるが、間を取ることが出来るのでしょうか。しかも、スキは見せられない。

植田 高段になるにつれてコツがわかってくる。

阪根 これはやはり修練ですか。

植田 ありきたりの修行ではいけない。警視庁なんかでは、全国からより抜かれた選手と、豊富な指導陣のなかで鍛え抜かれている。それらに対抗するには、修行の場のムードに気を使っている。時間的には最高の効果を上げるように気を配っている。

うれしい弟子の活躍

阪根 先ごろ、世界選手権をテレビで見ましたが、外国勢も強くなりましたね。

植田 いま、世界で二十四か国が連盟に加盟している。世界大会は、昭和四十五年が第一回で、以後三年おきに開かれている。第一回大会の参加国は、八か国だったのが、ことしは二十一か国が参加しました。段も三、四段だったのが、現在は日系の選手を入れると七段級の選手がいる。

阪根 段位の取得はどこでやるのですか。

植田 全日本剣道連盟がやります。

阪根 外国選手も日本へ来るわけですね。

植田 そうです。しかし、世界大会がある場合は、現地で昇段試験をすることがある。日本と同じように実技と形と学科試験がある。外国人は日本の剣道の心を探りたいというので、正座なんかも、几帳面にやる。むしろ慣れた日本人のほうがくずれかかっているぐらいだ。技量の面でも伸びている。しかし、年が寄ってからの修練の度合いが違う。日本の場合は、数がたくさんいて練り上げていく。だから、外国では柔道のヘーシングのような人は出てこないと思う。ただ、小さい子供はブラジルあたりが日本に負けにくいぐらいに強くなっている。

阪根 韓国も強いですね。

植田 この前、韓国の大学生が来日して、全日本の学生を相手にして試合をしたが、引き技をやる韓国が勝った。世界大会では、日本が4-0で勝ちました。

阪根 二十四か国は、それぞれ剣道連盟の支部を持っているのですか。

植田 そうです。イギリスでは念力道場とか、フランスでは葉隠道場とかという名前をつけて、まじめに剣道に取り組んでいる。もちろん「気をつけ」「正座」は日本語でやっている。

阪根 最近、非常に国際化しましたが、剣道の完成度というか芸術度は大変高いと思う。それだけに、やり出したら魅力を感じ、世界中に浸透すると思うし、オリンピック参加も夢ではない。

植田 指導者が問題だ。日本から道具を送ったり、指導者が長期にわたって指導競れば盛んになるだろう。フランス、イギリスでは、私たちが十年前に行ったときは、剣道人口が三、四百人だったのが、今は五、六千人に増えている。オリンピックに参加できればありがたい。戦後剣道がなくなったときのことを思えば夢みたいだ。

阪根 すそ野を広げるためにも、日本の剣道人口を増やさなければいけない。県下の剣道人口は。

植田 五十三年の調べでは有段者が五千四百人いる。毎年二百人ぐらい増えている。有段者のなかには女子が二百人含まれている。特に高校の女子が盛んだ。男子部員より多い学校がある。剣道人口は有段者の四、五倍として約二万五千人はいる。ぜんこくでは、有段者が七十四万八千人で、そのうち一割を女子が占めている。剣道人口にすると四百五十万人いる。香川県は率にしたら高いほうだ。少年剣道も盛んだし`剣道香川`といえる。阪根チビッ子剣士が、さっそうと歩いている姿が見られるが、もっと増えてほしい。

植田 親は、最初は躰、根性を目標にしてやらせている。しかし、指導者が躰、基本に忠実にやっている、今度は早く試合をさせてくれ、という親がいる。

阪根 子供たちの伸び具合、将来性は・・・・・・・・。

植田 少年時代にどんどん伸びるのは、九州地区が一番だ。やはり伝統の力だろう。昔から土壌がいいのと、指導者にも恵まれている。福岡、佐賀、熊本、鹿児島などは全国の供給県になっている。県下も、少年剣道が盛んになってきたので楽しみだが、インターハイ、国体で小豆島、琴平高校が優勝したところよりは落ちる。

阪根 香川は、かつて何事においても人材の供給県になっていたが、剣道も復活してほしい。

植田 私も、せめて警察のなかから日本選手権、世界選手権をとれる選手を出すことに野望を抱いている。

阪根 県下の子供たちは、根性がないといわれるが、実際はどうですか。

植田 剣道の試合を見ている、九州の選手は積極的で、香川の選手は`受けて立つ`といたほうだ。守りも大切だが、もっと攻めがほしい。

阪根 昔は、学校での剣道教育が盛んだったのですが・・・・・・・・。

植田 いま、香大のクラブ活動を見ているが、学生には「君たちの本分は学業だから、それを第一に考え、残った後の馬力で練習に励め」と教えている。学生として人間確立に、剣道の修練が役立ってもらいたい。警察になると実力養成だから技術向上にウエートを置く。一般の方には、社会人としての自覚を十分に持ってもらい、そうしたなかで剣道を考え、しかも楽しみながらやってもらっている。

阪根 何かおもしろいエピソードは・・・・・・・・。

植田 この二十日から武道館で、恒例の初心者教室が始まります。これには、チビッ子からお年寄りまで参加している。この教室の出身で六十歳の女の人が、二年間の練習で八月に初段が受かりました。息子は四段だ。六歳の孫の稽古についてきて見ていたのが、自分でもやるきっかけになった。「剣道をやり始めて肩がこらなくなった。道場へ来るのが楽しみだ」といっています。楽しいのは、チビッ子の練習が終わると、おばあさんが道着をつけて四段の息子に飛びかかってくることです。孫はジュースを飲みながら見守っている。親子二代はときどき見られるが、おばあさん、息子、孫の三代と一緒に練習をやっているのは珍しい。

阪根 まさに、ファミリースポーツですね。

植田 また、だんなさん、奥さんとも二段の`夫婦剣士`も道場に来ている。稽古に通っている間は夫婦げんかもしないと思う。

反哺の精神（昭和五十四年九月十六日付）

阪根 先生の長い剣道歴の中で、活躍された思い出に残る名場面は。

植田 戦前の神宮大会優勝、戦後の日本選手権二位にしても過去のことになりました。今は、弟子たちがスクスク育ち、活躍してくれるのがうれしい。

阪根 昭和八年の神宮大会で個人優勝したときの相手は・・・・・・。

植田 準決勝で同級生の藤本薫選手（逆二刀流）を破り、決勝では岡山の選手を下しました。翌日の団体でも藤本君と組んで優勝した。昭和十年の神宮大会の在郷軍人の部で優勝したときは、鈴木莊六陸軍大将から「思無邪是達成之妙境也」（おもいによこしまなし これ たっせいのみょうきょうなり）の軸をいただいた。思い出に残っているのは軍隊に行ったとき、林銑十郎、荒木貞夫の両陸軍大将から名前入りの旗をもらったことです。連隊に持っていったら、二等兵が陸軍大将の旗を二本も持っているということで、みんなびっくりしていた（笑い）。それにしても藤本君が戦死したのは残念だ。

阪根 お父さん（植田平太郎範士）の天覧試合は見ましたか。

植田 昭和四、九、十五と見てます。私は男兄弟四人でだれかが剣道をやれということになったが、兄たちは逃げ、結局、三男の私がやることになった。少し抵抗を感じ、飛び込んだが、剣道に関しては親父の精神を引き継いでいる。

阪根 剣道をやる人に対する要望は。

植田 社会に出て役立つ剣道であってほしい。それには、社会から認められる`誠`が必要だ。反哺の気持ちがある。人の種に尽くす剣道でなければいけない。そういう意味では、スポーツ少年団の指導者には感謝したい。

阪根 最近の子供は自分のことしか考えない風潮があるのですが・・・・・・。

植田 剣道では、所によって、国のために血を流す、家のために汗を流す、友のために涙を流す、といったことを指導する。特に、友のために涙を流すというのは、非常にむずかしい。私は、折にふれ「いざというときに頼りがいのある人間になれ」と、子供たちに教えている。子供たちも、普通だと大人に向かっていくのは恐怖感があるが、道着をつけて道場へはいると、倒されたも倒されても立ち上がり、大人に向かっていく。そういう意味で根性は育ってきている。

阪根 有名な袴談議を聞かせて下さい。

植田 剣道の袴の前の五つのひだは、五倫（君臣、父子、夫婦、長幼、朋友）五常（仁、義、礼、智、信）の道を訓している。裏側の一本のひだは二心のない誠の道を示したものだ。腰板は背筋をぴんとさせるし、紐は、正しく身につけて心を引き締めるものだ。だから、私は`防具`と呼ばないで`剣道具`とっている。`いわれ`を知って使えば、折り目正しい人間に育つと思う。

阪根 確かに剣道は完成度が高いし、道具は美的なところがある。

植田 東京で聞いたのですが、女子の生徒が道具をかついで銀座を歩くのは`サマ`になっているらしい。

阪根 先生の生活信条、座右の銘は。

植田 相手と自分が互いに尊重し合う「和合一体」と過去と前途を正しく見つめる「温故知新」です。それと、反哺の精神だ。剣道を通して香川県のために尽くしたい。

三つの言葉

植田 一

過日山神教官から、剣道場に掲げてある額「至大至剛」の意味について質問された。

私は昭和四十七年、全剣連創立創立二十周年祈念「現代剣道百家箴」に寄稿依頼をうけて、`二つの言葉`というものを書いた。即ち、和合一体と温故知新である。本当は、それに至大至剛を加えた`三つの言葉`を書くつもりでいたが、紙数の制限があり、二つに変えた。そんなわけで、翌年三月発刊の「剣心」誌第二号`二つの言葉`に至大至剛を加えたのが`三つの言葉`である。

額の字「至大至剛」は、戦前、天皇陛下の侍従武官長であった、元大日本武徳会々長、陸軍大将男爵奈良武次閣下が、亡父平太郎に、家の道場に掲げるようにとご揮毫下さった書である。幸い戦災から残ったので、昭和三十何年であったか部へ寄贈して、剣友堀川久栄君が額に仕上げ、道場の中央上座へ掲額したものである。

私は和合一体、温故知新、至大至剛を剣道修行の過程における座右の銘として、常に深く心に刻んでいる。一昨年、月刊誌「剣道時代」五月号にも、`私の剣道修行`の中で、私の心境を取り上げてくれているので、これらを読まれた先輩諸兄には、いささかくど過ぎるかと思縮だが、学生は次々と卒業して学園を後にするので、新しい者のため、その三つの意味合いを、再び説明しておくことにする。

和合一体

和合一体は、昭和三十八年（四十九才）剣道八段を允許されたとき、開いてくれた祝賀会でお礼中引用した言葉

和合一体とは文字どおり`相手と自分と融け合っ一つになる`ことで、つまり相手を打ってやろうと意気込みすぎるのではなく、相手の中へはいり、また自分の心の中、動きの中へ相手を引き入れてくる。そこには決して無理のない渾然一体の姿、そこで始めて正しい技が生まれてくる。

日頃稽古している相手が、即ち自分の師であると考え、自分だけの剣道ではなく、相手と共にある和合一体の状況において、剣の道を行すべきだということを、齢五十近くなったその頃つくづくと感じたものである。今なおそうであるが、稽古をした後で、ほのぼのとした互いの余韻が残る気品と風格のある剣道を、今後とも修行し続けたいと心から願っている。

温故知新

次に四十四年（五十五才）範士の称号を頂いた祝賀会の席であいさつしたときの心境
温故知新は、`古きを温めて、新しきを知る`であるが、論語の中に、「子曰く、故きを温ねて新しきを知る。以て師と為すべし」とあるように、古い事物を究めて、新しい知識や見解をひらくことで、語源的には「肉をとろ火で煮つめて、スープのような知恵のエッセンスを得る。それが現在のことがらについて新しいものを教えてくれる」との意だそ

うである。古い形式や、考え方を重んじる剣道において、古いことだけにとらわれすぎると進歩がなく、新しいことに走りすぎると迎合に陥りやすくなる。

古いことに失しない。新しいことにかぶれない、絶えず過去と前途を正しく見つめて、しっかりと進んで行く。ここに温故知新たる由縁があり、真の立派な剣道の探求、向上が得られるものだろうと思う。

至大至剛

最後の至大至剛は、大に至り剛に至で、私自身の修行にあわせて、今、青少年達を指導する心構えになっている。

大は大きく雄大であり、剛は意志の力、節操の堅くて強いこと、即ち直である。

「この上もなく大きく育て、剛く育て」という願いを込めたものと解釈している。

孟子の訓え（第二巻）浩然の気の中で説明されているし、また宮本武蔵の剣法でも、「直道以て極となす」ということで、その修行の第一に、「心の邪なきことを思う。世々の道にそむくことなし」をあげている。

直とは至大至剛で、大悟にいたるまでの真直ぐな道である。邪なきは心の迷いなきことであり、道にそむくことなきは天理遵法の大精神であって、これこそ剣道修行の最終のものであろうと思う。

こうした心の持ち方、言動、行動を人間形成を目指す基盤として、ただ道場の中だけでなく、広く社会生活を営む上において活かすこと、それは、今日生を受けた我々剣を学ぶ者の務めだと考えている。

（剣心 第八号 昭和五十九年五月）

剣道か、剣術か 剣道具か、防具か 竹刀か、打合いの用具か

範士九段 植 田 一

○剣道か、剣術か

新字鑑、広辞苑などを見ると、「剣術」とは剣のわざ、技芸、学問、てだて、手段、はかりごと、たくらみなどとあるが、要するにつぎを使用するわざ、刀剣を手にして敵に当たる技術を言っている。

「道」は人が考えたり、行ったりすることからの条理、道理で、道理を弁えること、分別を必要とすることで、剣法、撃剣、剣術などの呼称から、明治以後、術以上に強く道を求め、剣術を以て心身を鍛練する意味から「剣道」と呼ばれるようになった。

武道の武は本字は武(左上の点のない武)で、戈を止むるの意、元来戈を揮って人を斬るのではなく、人を斬らんとする戈を制し止めるのが武である。

昔から武に七徳あり、即ち「暴を禁じ、兵を戢め、大を保ち、功を定め、民を安んじ、衆を和し、財を豊にす」との訓えがあるが、ややもすると試合万能におちいりがちな昨今、礼に始まり礼に終わる深い哲理をもつ剣道を、今一度その文字の意味からも見つめ直して見る必要があるのではなかろうか。

○剣道具か、防具か

剣道具は剣道修練上、そのよってもって来たる意義をよく弁え、これを効果あらしめるように使用しなければならない。

ただ相手の打突を防ぐためだけでなく、単なる運動用具のプロテクターと違い、心を引き締める鎧の如く、一分の隙もなく身にまとうことが肝要である。

私は幼い頃から剣道具の大切さを父から教えられた。十二月三十一日夕方、父の剣道具を二階座敷の床の間の上に鎧兜の如く飾りつけ、前へ三宝にのせた鏡餅を供えるのが若き私の役目の一つであった。

剣道衣、袴を作った先人達の心の用いかた(ハカマ談議で既に武道評論に記載した)、胴、垂の効目、面の正しい着け方、紐の結び方など、心の教育が段位の進むに依りて十分に成り立つ。

今の全剣連の試合規則、審判規則や幼少年指導要領の中で、防具という言葉は削除され一カ所もない。その使われていない言葉を、過去の習慣だけで意に解せず使用しては、剣道を志す者何か心構え、考え方の不備を問われても致し方あるまい。

私は少年の頃から剣道具と呼称して、防具と言った覚えは一度もない。

○竹刀か、打合いの用具か

剣道の理念ははっきりと示されているが、竹刀の取り扱い方が、修行者の心構えにもとることを各種大会でしばしば見受ける。

例えば

- ①竹刀を竹刀袋に入れたまま肩にかけて道場の中を歩く。
- ②床に置いてある竹刀を平気で跨ぐ。
- ③竹刀の構え方が刀の抜き方と違う。
- ④試合中落とした竹刀を手にとるとき、切先きの方や刃の方を不用意に掴みとる。

これらは剣道の刀の理法から外れていることおびたしい。一度日本刀を手にして、刀の手入れをしてみてはどうか。刀身を鞘から抜いて柄の目釘をとり、切羽や鑷はばきをはすし、刀とはどんなものであるか、とくと見ればよくわかる。

剣道の講習会で色々理論的にやりとりするのもよいが、肝心の心を正す竹刀の大切さをなおざりにしては、剣道を崩すことになりかねないと私は最近心寒い思いがする。

皆さんは、皆さんの道場で汗水たらして学ぶものは、防具をつけ、打合いの用具をもった剣術ではなく、剣道具を身にまとい、真剣の如き竹刀をもって、正しい剣道を修め磨いているものであるという自覚と誇りを、しっかりと心の中に持ち続けていてもらいたい。

◇追記 手拭いの正しいかむり方

剣道では面を着けるとき必ず手拭いを頭にかむる。そのかむり方を見ていると幼少、中年、老年、初心者、高段者を問わず、いずれもがあまり関心をもっていないのがよくわかる。

即ち手拭い（日本手拭いであって、面タオルではない）には、昔からの極意の言葉などを日本字で墨書染上げたものが多く使用されている。

その日本の文字を裏にしたり（自分の方から正しく字が読めるのが表である）、上下を反対にしていっこう平気で日本の剣道をやっている積もりでいるその無関心さは、一体どういうことであろうか。

手拭いをかむるとき、その書いた先賢の方が机に向かって正座して心をこめて揮毫されている姿をよく考え、その心に添うようにその字を正しく読み、心に刻んで頭に巻き、面を着けるべきものであらうと私は考える。そこに礼儀というものが芽生え、手拭いをかむる者の心の修行ができてくるのである。

茶道で家元や僧侶の書いた書や絵を拝見するとき必ず礼をする。そこに書や絵を書いた者がいるとして（見立て）頭を下げるのだと聞いたことがある。

剣道において、垂の名前は人から見て自分が誰であるかを知ってもらうためのもの、また面胴その他剣道具の仕立ての飾りは、自分を良く立派に見せるためのものであるが、手拭いの字はそれとは訳が違う。

頭にかむる手拭いの字は、人に見せるのでなく、自分がその字を拝見して心にしまうものであって、そこを間違えてはいけない。

（平成七年一月五日記 正月早々 暴言多謝）